

平成三十一年度入学試験問題

注意

国語

- 一 問題冊子は一冊（15ページ）、解答用紙は二枚、下書き用紙は一枚です。
- 二 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 三 すべての解答用紙に、それぞれ二箇所受験番号を算用数字で記入しなさい。
- 四 解答は、すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は必ず持ち帰りなさい。

問題 一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(出題の都合上、本文に省略した箇所がある。)

季節の訪れを正確に知ることは出来ないか――。

(1) 「新しい生き方」を始めた人類は、切実にそう考えたに違いありません。「新しい生き方」とは、それまでの狩猟採集とは一線を画す「農耕牧畜という生き方」のことです。

約一万年前にホモ・サピエンスが始めたこの生き方が、現代にまで続く「文明」の始まりです。最初の文明人である彼らにとって、種まきの時期や、定期的にやってくる雨期と洪水、あるいは乾期の日照りは、つねに悩みの種でした。季節の訪れを知る正確な手がかりを、「文明」によって生きようとする彼らは必要としました。

経験上彼らは、季節が周期的に訪れることは知っていました。季節は移り、同じようにそれを繰り返す。問題は「いま」が「いつ」で、その変化は「いま」からどのくらいあとにやってくるか、それを、そしてまた、その方法を見つけることでした。

彼らはその方法を「天」に見つけました。気まぐれな自然の変化の中で、天だけは規則正しい変化を繰り返していたからです。天とは、すなわち星の世界です。日は昇り、日は沈む。月は満ち、そして欠けていく。そうした天のリズムを、彼らは自然の変化をはかる「物差し」としたのです。前者のリズムが「一日」となり、後者のリズムが「一月」となりました。一月が一二回繰り返されると季節がひと巡りすることから、そこを一つの区切りとして「一年」とすることも決めました。⁽²⁾原始的な「暦」の誕生です。

なかでも、紀元前七世紀、メソポタミア南東部に新バビロニア帝国を打ち立てたカルデア人の作り上げた暦は特別でした。ギリシャ語で「川と川の間」を意味するメソポタミアは、チグリス川とユーフラテス川の間にあるヒヨク^アな平野であり、農耕牧畜が最も進んだ地域でした。そこで暮らすカルデア人は、後世の人たちが「カルデアの知恵」と呼ぶほどに、精緻で豊かな星に関する知識を持っていました。彼らはその知識を使って、正確な暦を作り上げたのです。

カルデア人が着目したのは、天における太陽の位置でした。太陽が季節によって少しずつ天における位置を変えていることを知っていたからです。その変化を正確に知るためには、天に目印をつける必要があります。ところが昼の空には、目印となるようなものはありません。そこで彼らは、夜の天球に目印を見つけることにします。夜の空に満天の星がカガヤいているからです。それらの星をグループに分け、「座標」にしたものが「星座」です。彼らは星座をもとに、季節の移り変わりとともに位置を変えていく太陽の動きを正確に読み取り、天にその軌道を描いてみせたのです。

とはいえ、実際の天に線を引くことはできません。そこで彼らは、頭の中に天球を思い浮かべ、そこに太陽の動きがたどれる線を引きました。これが「黄道」^{こうどう}です。太陽が黄道を一周する周期をもつて一年とする。これが現代人も使用している「太陽暦」ですが、その暦をカルデア人は、太陽の動きを、星座を利用して読み解くことで作り上げたのです。

なお「カルデア」という呼び名は、メソポタミア南東部に広がる湖沼地域を指す歴史的呼称です。紀元前一〇世紀以後にこの地に移り住んだセム系遊牧民の諸部族が、後世そのように呼ばれるようになったようです。しかしここでは単に、シュメールとかバビロニアとか、この地域を一般的に指す用語くらいに考えています。

人間の人間たるゆえんは「考える」力にあります。脳科学的に言えば考えるとは、脳の中に外部世界を投影し、それを内部モデル化したような内部世界を構築し、それを基準にして様々な判断や意味づけを行うことです。カルデア人はまさに「考える民」でした。彼らは、綿密な天体の観察をもとに、その考える力で太陽の動きをモデル化し、一年という時の周期（暦）の意味づけを行ったのです。カルデア人の暦が特別なものになりえたのは、それが、精緻で合理的な「考える力」に基づいて作られたものであったからだと言えます。

朝と夜を、一年における「月」と同じように一二に分け、一日を二四分割し、現代に通じる「一時間」という時間の単位を作ったのも、このカルデア人だと言われています。現代に通じる均一な科学的な時間のガイネン^ウは、天のリズムをモデル化するこ

とで生み出されたのです。

一方で、カルデア人にとって「時」は、自然に変化をもたらす「不思議な力」そのものでもありました。「年」は季節の変化を

もたらし、「月」は潮の満ち干の変化をもたらします。これらが太陽と月という「星の動き」に関係していることに、彼らは気づいていました。

天上世界が、地上世界に変化をもたらしている――。

星の動きを通してそう考えた彼らは、太陽や月以外の星の動きも、何らかの力で、世界に変化をもたらしていると考えました。ここでいう星とは惑星のことです。一般に星といえ、今の言葉では恒星のことですが、惑星は、恒星のように規律正しい集団行動に従いません。この集団行動に従わない惑星の動きは、神々の意図を表しているのではないか。カルデア人はそのように考えたのです。そして、「年」や「月」と同様、その「目に見えない」力を暦に取り入れたのが「曜日」です。

ここにもまた、カルデア人の「星の動きを読む能力」が深く関係してきます。彼らは太陽の動きを追うなかで、黄道の付近に他の星とは異なる不規則な動きをする星がいくつかあることに気づいていました。他の星たちは、北極星を中心に円運動を描いているにもかかわらず、その星たちだけは、そうした集団行動に従わず、まるでそれが自分の意思であるかのように不思議な動きを繰り返していたのです。「惑える星」。彼らはこれらの星をそう呼び、太陽や月とともに特別な星と位置づけました。「惑星」の発見です。

その当時彼らが見つけた惑星は、火星、水星、木星、金星、土星の五つだったと考えられています。円運動する多くの星たちの秩序だった動きが天の意思を反映しているものならば、その秩序に逆らって動く星たちこそ「乱れ」を引き起こす原因であると、彼らは考えました。五つの惑星にはそれぞれ神が住み、洪水や干ばつ、疫病や戦争など、人間社会の「変事」を支配しているというわけです。したがって、惑星の動きと人間社会の出来事の相関関係、これを読み解くことによって、次なる変化、すなわち未来を占うことができるかと考えたのでしよう。そこで誕生したのが、星によって未来を占う技術「占星術」です。

このように、変事を司る惑星の不思議な力を、生活の中に取り込もうとして作られたのが「曜日」⁽³⁾なのです。自然界にない「曜日」という摩訶不思議なリズムが暦のなかに存在し、その呼び名に惑星の名前が冠せられているのは、そうした理由からです。

カルデア人はこれらの星が、地球から遠い順に、「土星、木星、火星、太陽（日）、金星、水星、月」と並んでいると考えていました。この七つの星に「一時、二時、三時、四時、五時、六時、七時」という時間を順番に割り振れば、一日が二四時間であることから、「24時間―7時間×3＝余り3」という計算により、次の日の「1」は、前日の「1」に位置する星の三つ先の星、つまり、前日の「4」に位置する星が振り当てられることとなります。「土星」の次は「太陽（日）」、「太陽（日）」の次は「月」、その次は「火星」といった具合です。「土、日、月、火、水、木、金」といった曜日の順は、こうして決められたのではないかと考えられています。

自然の変化が「天体の動き」と関係していることに気づき、その動きを正確に観察することで「暦」という時間に関するモデルを作り上げたのがカルデア人です。しかし「天体の動き」自体については、合理的な説明を行うことはありませんでした。「星は、なぜ、そのように動くのか」という疑問に対して、彼らが持ち出した答えは、それが「神の意志」だからというものだったのです。秩序ある星の動き、不規則な星の動き、それらはすべて神が決めていて彼らは考えていました。彼らにとって、天は手の届かない「神の世界」であり、そこでの出来事は「神の意志」以外の何物でもありませんでした。

神の意志を人に見ることができない。だから、「星は、なぜ、そのように動くのか」という理由を人々は知ることが出来ない。つまり、それは人々にとって「見えない世界」であり、「見えない世界」を語りうるのは神だけだ、というのがカルデア人のみならず、当時の人々の標準的な考えだったのです。

ちなみにここでいう神は、のちの一神教でいうところの形而上学的な神ではありません。星座にあてはめられた神々の姿からもわかるとおり、人間社会を反映した「神話」的な神々です。こうした考えをイッシヨウエに付すことはできません。説明できないこと、人智じんちの及ばない力に対して神を持ち出すのは、昔も今も変わらないからです。科学の時代と言われる現代においても、星に祈り、星占いを信じる人は少なくありません。

いずれにしろ、天体の動きというかたちで人の前に姿を現す「見えない世界」が、我々が生きる「見える世界」に変化を及ぼすということに気がついた古代の人々は、「見えない世界」がもたらす変化を正確に知る手がかりとして、暦、あるいは時間を編

み出しました。⁽⁴⁾ 曆(時間)を通して、人類は〈見えない世界〉を記述する一步を踏み出したというわけです。曆の管理は、支配者の持つ特権でした。それは神の代理人としての地位を保証するものだったのです。

そしてこのことにより、人々の暮らしは大きく変わりはじめます。「時」を共有し、「時」によって出来事を記録することで、共同体の生き方に関するノウハウがどんどんチクセキ^オされていったからです。農耕牧畜という生き方が曆を欲し、観察と考える力で作り上げたその曆により、共同体をつくって生きる。そういう人類の新しい生き方は、シュメールの地で、都市文明として順調に発展の道を歩みはじめました。〈見えない世界〉と文明の間の密なる関係は、こうして始まったのです。

(松井孝典『文明は〈見えない世界〉がつくる』による)

問一 傍線部アイウエオを漢字に直しなさい。

問二 傍線部(1)について、人類が「そう考えた」のはなぜか、説明しなさい。

問三 傍線部(2)について、「原始的な「曆」は自然界のどのような特性を利用して誕生したのか、説明しなさい。

問四 傍線部(3)について、「自然界にない「曜日」という摩訶不思議なリズムが曆のなかに存在」するのはなぜか、わかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部(4)について、「曆(時間)を通して、人類は〈見えない世界〉を記述する一步を踏み出した」というのは、どういうことか、〈見えない世界〉の意味がわかるように、説明しなさい。

問題 二

次の文章は浅田次郎の「のはず角筈にて」の一部分である。四十六歳の貫井恭一が八歳の時の出来事を回想している場面である。よく読んで、後の問に答えなさい。

「恭ちゃん、寿司でも食おうか」

角筈のバス停に降り立つと、父は注一パナマの庇ひさしを上げて夕空を仰ぎながらそう言った。

「ねえ、おとうさん。注二立教の長嶋は来年ジャイアンツに入るんだって、ほんと?」

「さあね。そんなこと、わからないよ」

手を引かれて信号を渡りながら、恭一は父との会話を探していた。父のもう片方の手に提さげられたポストンバッグが(1)爆弾のように思えてならなかった。

通りを渡りきると、父は困惑しきった表情であたりを見回し、メガネをはずして汗を拭ぬぐった。何かに躊躇ちゅうちよしているふうだった。

中野からのバスの中で、ずっと考え続けていたせりふを、恭一は口にした。

「あのね、おとうさん。ぼく、新しいおかあさんがきてもいいよ。あのおねえさん、きれいじゃないか。おかあさんよりも、若くてきれいだよ——ねえ、そうしてよ」

それは、(2)せりふだった。父が何度か家に連れてきた女を、きれいだななどと思ったことはなかった。狸たぬきのような目をした、唇の歪ゆがんだ女だった。恭一と目が合うと、女はきまってチエツと舌打ちをし、顔をそむけた。

おぞましいせりふを口にしたとたん、恭一は目をつむって、死んだ母に詫わびた。

「そうかい。でも、あつちはおまえのことがあんまり好きじゃないらしい」

「どうしてさ。ぼく、何もしてないよ」

「いや、子供が好きじゃないんだ」

父は言いながら、東口の石造りの駅舎を振り返った。

「寿司でも、食おうか。おなかへったろう」

「へってないよ」

寿司を食うことが、最後の儀式のような気がしてならなかった。食べたらずれでおしまいなのだと思った。

「ねえ、おとうさん。あのおねえさん、どこかで待ってるの？」

父の目はメガネの奥で一瞬ぎよつとみひらかれたが、じきに哀しい色かなに変わった。

「どうして？」

「ううん、べつに。そんな気がしただけ」

父の麻の背広の肩には、汗がしみていた。

バス停の前の寿司屋に入ると、何でも好きなものを食えと父は言った。

止まり木に座って寿司を注文する作法を、恭一は知らなかった。黙りこくっていると、父は子供の好きそうなものを勝手に注文した。日ごろの様子とはちがうやさしさだった。

泣いてすがれば、父の決心は揺らぐかも知れないと思った。だが、少年にも矜持きょうじはあった。

心とはうらはらに、頬ほおのところがゆるゆるな寿司の旨うまさが悲しかった。

「恭ちゃん、おまえ勉強だけはちゃんとしなけりやだめだぞ」

と、ビールを飲みながら父は、とうとう言い置くようなことを口にした。

「おとうさんは勉強ができなかったからな。小僧に出されたし、兵隊にもとられたし、したくてもできなかった。だから今でも、みんなにはかにされる」

「おとうさんはばかじゃないよ」

本当は、子供を捨てるほどばかじゃないよね、と言おうとした。意味を汲みとってくれたかどうかは、わからない。

「ばかさ。ばかだから会社もつぶしちゃまう。おとうさんは、ほんとに商売なんてしたくはなかったんだよ。気が小さいから、サラリーマンに向いてるんだ」

「だったら、サラリーマンになればいいじゃないか」

「サラリーマンは、大学を出なけりゃなれないんだよ。日曜は休みで、土曜は半ドン^{注三}だ。おまけに銭金の苦勞をしなくていい」
ラジオが物哀しい演歌を唄っていた。父は寿司を食わずに、ビールばかりを飲んだ。そして、いかにも思いきったように、こわいことを言った。

「恭ちゃん、おとうさんはちよつと用事があるから、淀橋^{よどばし}のおじさんの家に行つてなさい。角筈からバスに乗つて、二つ目。わかるよな」

そこは新宿からほど近い、父の従兄^{いとこ}の家だった。

「ヤッチちゃんもクミちゃんも夏休みだから、おとうさんが迎えに行くまで遊んでいればいい」

恭一は愕然^{がくぜん}として嚙む^かことを忘れていた寿司を、やつとの思いで呑み^の下した。

「きょう、迎えにきてくれるの？」

父は明らかに答えを踏^{ためら}った。

「さあ……仕事のつごうだな。迎えに行けなかったなら泊まれればいいじゃないか」

「いいよ。ぼく、うちに帰つてる。うちで待つてるから、おとうさん、帰つてきてよ」

おねがいします、と言いたかったが、声にはならなかった。

「だめだめ、おじさんの家に行つていなさい。おとうさん、電話しておくから」

それから父は、法外な額の小遣を都バスの回数券とともに恭一の手握らせた。

父とは、角筈のバス停で別れた。

「なら、ここで待ってるよ。ずっと待ってるから、ここに戻ってきて」

「わからんやつだな。きょうは帰れるかどうかもわからないって、言ってるじゃないか」

「でも待ってるよ。最終のバスまで待ってるから、だから、なるだけ帰ってきて」

たぶん、意思は通じた。父は宵の路上に屈みこんで、恭一の肩を抱いた。

「やっぱりサラリーマンがいいな。恭ちゃんもしっかり勉強して、大きな会社に就職しなけりゃだめだよ」

サラリーマンになれば、子供を捨てなくてもすむのか、と恭一は叫びたかった。

父は行ってしまった。

戻るはずのない父を、恭一は角筈のバス停で待ち続けた。

街灯の白いあかりが、ぼんやりと赤や青のネオンを吸いこむほどの、湿った夜だった。はじめは行き交う車を眺め、そのうち

半ズボンのポケットに蠟石が入っているのに気付いて、舗道にゼロ戦の絵を描いた。

バス停のまわりにゼロ戦と戦艦大和の壮大な戦隊が出現しても、父は帰ってこなかった。

食堂の店員に叱られた。店先にいたずら書きをしてしまったことを素直にあやまると、案外やさしげに、こんなところで何をしているのだと訊かれた。

おとうさんを待っている、と言った。言いながら、言葉の苦さに唇を噛んだ。父が戻るはずのないことはわかっていた。だが、もしそうなると自分はみなしごになってしまふのだから、待っているほかはないのだと思った。

夜が更けて店が閉まると、店員は裏声でロカビリーを唄いながら、恭一の汚した舗道をデッキブラシで洗い始めた。シャッターを下ろしかけてうんざりと恭一を見、いちど店に入ってから冷えたラムネを持ってきてくれた。

何台ものバスが過ぎた。乗客は次第に減って行った。一台をやりすごすたびに、恭一の心もうつろになって行った。からっぽのバスが来ると、胸もからっぽになった。

荻窪行の最終が来た。わずかな乗客は、みな降りてしまった。

「最終でえす——ぼく、最終よ。いいの？」

折り畳みのドアを引きかけながら、車掌が身を乗り出して訊ねた。バスに乗る前に、恭一はもういちど角笛の街頭を振り返った。

店々の灯もあらかた消えた舗道には、野良猫が群れていた。

淀橋の親類の家は風呂桶の職人だった。

バス停には伯母が迎えにきていた。父の電話があつてから、二時間もそこに待っていたのだと伯母は言った。

「ごめんなさい、おばさん」

「恭ちゃんがあやまることじゃないよ」

伯母はそれきり黙りこくってしまった。

自分の身の上にいったい何が起こったのか、恭一はほとんど正確に知っていた。ただ、知っていることを悟られまいと、無知な子供を装った。

「おばさん、立教の長嶋は、来年ジャイアンツに入るんだって。ほんとかな」

「さあ……おばちゃん、わかんないよ。うちでおじちゃんに聞いてみな」

伯母の手は母の温もりを思い出させた。

成子坂を下って行くと、仕事場の前に縁台を出して、伯父がビールを飲んでいた。注六またいとこにあたる保夫と久美子が、膝をかかえて線香花火をのぞいていた。

「あ、恭ちゃんがきた」

寝巻姿の久美子が下駄を鳴らして走ってきた。

「恭ちゃん、これからうちの子になるんだって」

「ばか言うんじゃない」と、伯母が強い声で叱った。

「だって、おとうさんが言ってたよ。恭ちゃんちはおばちゃんが死んじゃって、おじちゃんがどこかへ行っちゃったから、恭ちゃんにはクミコのおにいちゃんになるんだって」

小さな久美子に腰を抱きしめられたとき、恭一は腕を^{まぶた}瞼に当てて、初めて泣いた。⁽⁴⁾

(浅田次郎「角筈にて」による)

注一 パナマ \parallel パナマ帽のこと。夏向きのぼうし。

注二 立教の長嶋 \parallel 長嶋茂雄のこと。当時、立教大学に在籍していた。

注三 半ドン \parallel 仕事が午前中で終わること。

注四 ゼロ戦 \parallel 戦闘機の種類。

注五 ロカビリー \parallel 主に一九六〇年代以降、若者を中心に日本でも流行した音楽。

注六 またいとこ \parallel 自分からみて祖父母の兄弟姉妹の孫である。六親等の傍系親族の一つ。はとこともう。

問一 傍線部(1)は恭一のような気持ちを表現したものか、比喩に即して説明しなさい。

問二 傍線部(2)は恭一のような気持ちを表現したものか、本文の内容をふまえて説明しなさい。

問三 二箇所^の波線部は、ほぼ同じ内容の発言である。恭一がなぜこのように発言したのか、恭一の気持ちをふまえて説明しなさい。

問四 傍線部(3)は恭一のような状況を表現したものか、書きなさい。

問五 傍線部(4)で恭一が「初めて泣いた」のはどうしてか、恭一の気持ちを説明しなさい。

問題 三

次の文章は、法勝寺千僧供養の際、左大臣（藤原頼長）たちもこれに参会することになったが、道中、左大臣と公卿（ここでは、左大臣より下位の立場の者）とが出会し、左大臣の前を行く公卿が牛車を停め、左大臣の牛車を先に行かせようとした出来事とその後の話である。以下の文章を読んで、後の問に答えなさい。

これも今は昔、橘大膳亮大夫以長注一といふ藏人の五位ありけり。法勝寺千僧供養に、鳥羽院御幸ありけるに、宇治左大臣参り給ひけり。先に公卿の車行きけり。後より左府参り給ひければ、車を押さへてありければ、御前の隨身注五、下りて通りけり。それにこの以長一人下りざりけり。いかなる事にかと見る程に、通らせ給ひぬ。さて、帰らせ給ひて、「いかなる事ぞ。公卿あひて、礼節して車を押さへたれば、御前の隨身みな下りたるに、未練の者こそあらめ、以長、下りざりつるは」と仰せらる。以長申すやう、「こはいかなる仰せにか候らん。礼節と申し候は、前にまかる人、後より御出なり候はば、車を遣り返して、御車に向かへて、牛をかきはづして、榻注八に軛くびきを置きて、通し参らすをこそ、礼節とは申し候に、先に行く人、車を押さへ候とも、後注九を向け参らせて通し参らすは、礼節にては候はで、無礼をいたすに候とこそ見えつれば、さらん人には、なんでふ下り候はんずるぞと思ひて、下り候はざりつるに候。誤りてさも候はば、うち寄せて、一言葉申さばやと思ひ候ひつれども、以長、年老い候ひにたれば、おさへて候ひつるに候」と申しければ、左大臣殿、「いさ、この事いがあるべからん」とて、あの御方に、「かか

る事こそ候へ。いかに候はんずる事ぞ」と申させ給ひければ、「以長、古侍ふるまわひに候ひけり」とぞ仰事おほせごとありける。昔は、かきはづして榻なぐさをば、轅なぐさの中に、下りんずるやうに置きけり。これぞ礼節にてはあんなるとぞ。

（『宇治拾遺物語』による）

注一 橘大膳亮大夫以長もろなが藤原頼長に仕えた。

注二 千僧供養せんそう千人の僧を招き齋さいを設けて行なう供養。

注三 宇治左大臣||藤原頼長。学識に明るいと評された。

注四 左府||左大臣の唐名。

注五 御前の隨身||ここでは左大臣（藤原頼長）に仕える者。

注六 下りて||（行列を先導する）馬から下りて。

注七 未練の者||未熟な者。

注八 榻||牛車の轆（前方に出た二本の長い棒）の軛（轆の端につけ、牛の首につける横木）を支える台。乗り降りする際の踏み台にも用いる。

注九 後を向け||牛車の後方を向け。

注十 おさへて||差し控えて。我慢して。

注十一 あの御方||頼長の父の忠実を指すと言われる。礼儀作法に詳しい人。

問一 傍線部アイウエを現代語訳しなさい。

問二 破線部①について、「以長」の行動に対して、「左大臣殿」が「いかなる事ぞ」と不審に思ったのはなぜか、わかりやすく説明しなさい。

問三 破線部②について、「以長」は、どのようなふるまいを「無礼」であると言っているのか、わかりやすく説明しなさい。

問四 破線部③について、「あの御方」は「以長」の言動をどう評価しているか、本文の内容をふまえながら、わかりやすく説明しなさい。

問題 四

次の詩は于武陵の作である。これを読んで、後の問に答えなさい。(設問の都合上、送り仮名を省略した所がある。)

感^{注一}情^ニ

青^{トコシヘニ}山^ニ長^ニ寂^ニ寞^{タリ}

南^ニ望^{シテ}独^リ高^ニ歌^ス

(1) 四^ニ海^ニ故^ニ人^ニ尽^ス

九^{注二}原^ニ新^{しん}壟^{注三}多^シ

西^{ノカタ}沈^ム浮^ふ世^{せいノ}日^ニ

東^{ノカタ}注^グ逝^{せい}川^{せんノ} **A**

不^{ザンバ}使^メ年^{ねん}華^{くわ}駐^{とど}

此、生能幾何⁽²⁾

〔全唐詩〕による

注一 感情に物事に触れて、思いが湧き上がる。

注二 九原は墓地として有名な地名。ここでは墓地を指す。

注三 壟は墓。

注四 年華は歳月。時の流れ。

問一 この詩は近体詩である。詩形を漢字四字で答えなさい。

問二 空欄Aに入る最も適当な語を次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 岸 ② 水 ③ 泡 ④ 流 ⑤ 波

問三 傍線部(1)をわかりやすく現代語訳しなさい。

問四 傍線部(2)をすべて平仮名で書き下し文にしなさい。

問五 この詩に込められた作者の思いを、詩全体をふまえて説明しなさい。